

移民労働者の国

在モーリシャス日本国大使館

モーリシャスは、世界で最初に大規模な移民労働が成功裡に導入された国です。

同国では、1835年の奴隷制廃止の結果、製糖業（サトウキビ生産）の労働力不足が深刻化し、フランス系モーリシャス人や英国人の農園主たちは主にインド、他にもアフリカや東南アジア、中国からの労働力の調達・輸送を行いました。その数は、1834年から1920年の間に約50万人。首都ポートルイスの港のほとりに、当時こうした移民労働者が最初に上陸し、検疫や登録を行った「アプラヴァシ・ガート」（ヒンディー語で移民の上陸地（Depot, Landing Place of Immigrants）という意味）という建物が残されており、2006年にユネスコの世界遺産に登録されました。右建物はグローバル経済の萌芽期の様子とともに史上最も大規模な移民活動の一つが記録された場所なのです。

なお、現在のモーリシャス人の60～70%はそうした人々の子孫とされています。その結果、今やインド、欧州、アフリカ、中国等にルーツを持つ多様な人たちが構成されているモーリシャス。政界・官会にはインド系が多く、イスラム系や中国系は経済界に多いという大まかな傾向はありますが、特定の民族・宗教で構成されるゲットーも排他的な言動もみられません。チャイナタウンと言っても、そこにはモスクがあったり、隣でインド系の人八百屋を営んでいたり。ヒンズーのお祭りも中国の春節も、ここでは等しく国の祝日であり、みんなが祝います。

遙か昔、火山でできたこの島国において全ての人は移民の子孫という歴史の記憶がなせる業でしょうか。まさに国旗の色のように、民族間の融和が大切にされているレインボーネーションと言えます。